ニジェール支所便り

2020年1月号

【編集長】小畑支所長　【編集担当】佐々木企画調査員
Tel:（227）2073 5569　Fax:（227）2073 2985　E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

☆ニジェール支所便りが JICA ニジェール支所の HP でも閲覧できるようになりました！懐かしのバックナンバーにもここからアクセスできます!! ⇒ https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/index.html

今月のトピック

- 新・支所長のつぶやき　～ピリピリと Perfume とよくものがこわれる件　ぱーと 2～
- 12 月の支所の活動紹介
  ～帰国研修員の報告会
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
  ～みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2～
  ～PASVA：農業普及システム改善プロジェクト～
- 新シリーズ　国際機関で活躍する日本人＠ニジェール
- ニジェールにおける活動紹介
  ～ニジェールでゴミを集める日本人　第 25 話　−統合と分断、失われてありがたさが分かるもの～
- 巻末連載企画！OD のいちおし

支所長のつぶやき　～ピリピリと Perfume とよくものがこわれる件　ぱーと2～

〈先月号からの続き〉 *もうすでに前回の話を忘れてしまっておられる方は、先月号（↓）をご参照ください！*
https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201912.pdf

見たものは、なんといったらいいか、電線には黒いレジ袋が複数結んであり、どこから持ってきたのか頭大の石の上に少しずつ小さな石が積まれた石塔が電線に沿って道に並んでいるのだ。

「おーっ、こ、これは恐山の霊場ではないか！」。（あまりの衝撃に写真撮り忘れ）。
←こんな感じです。

誰が作ったのかとガルディアンに聞いたら、自分と近所のガルディアン仲間だと胸を張る。

「えらい！」 これ日本人にできるか？

つい見直してしまった。

白いレジ袋ならもっとよかったのだが、次に期待したい。

ガルディアンに白いバスタオルを渡し、念のため電線の中央に結んでおくように言った。いまだにバスタオルは戻ってこないが、まあそんな小さなことはどうでもいい。

結局ニジェレックが来たのは 22 時少し前だった。

そういえばこの半年間、「実にいろいろなものがこわれてきたことだなあ」、と、古文のように回想してしまった。

拙宅の屋外発電機は3回取り換えそのたびに寝不足の夜が続いたなあとか、20 年落ちの拙車 RAV4 のガソリンメーターが10000FCFA 分給油しても下がったまま上がらなくなったなあとか（これ結構困ります）、13 年使っている事務所のコピー機が印刷する度に変な鳴き声を上げて真っ白い紙を吐き出したり同じ紙を大量に印刷したりしているなあとか（現在形[1]）、少し違うが自転車を買ったらブレーキが日本とは左右逆についていたなあとか、そんなことだ。その度にいろんなテクニシャンに世話になるのだが、またこわれる。

どこかで聞いたような気がするが、*「最高を求めて　終わりのない旅をするのは　きっと僕らが生きている証拠だから♪」*
なんだよなあ。
ニジェールで生活するとはそういうことだ。たぶん。

フレッシュな辛さが最高のピリピリ（なぜか西城秀樹さんを思い出す）。
刻んだあとは 2 日間指がひりひり。支所のスタッフに聞いたらゴム手袋をして刻むらしい。

「早く言ってくれよ！」

12 月の支所の活動紹介

【帰国研修員の報告会】

昨年 12 月 20 日、日本で研修を終えた 3 名の研修員が支所を訪れ、それぞれのアクションプランや日本の印象などについて、大いに語ってくれました。トップバッターは、九州センターにて 11/17～12/4 の日程で実施された研修（初等理数科教授法）に参加したラキアトゥさん（女性）です。、滞在中、複数の学校に訪れる機会もあり、一クラスの生徒数や、理数科の先生の板書の美しさ（定規を使わない！）、生徒自身が清掃活動を実施していることなど、ニジェールとの違いに驚きを隠せなかったといいます。また、研修の最終日にはホームステイも組み込まれており、なんとその受入家族がニジェール元隊員の家族（！）であったため、現地語でコミュニケーションをとることができたと、とても嬉しそうに話してくれました。ラキアトゥさんに続いて発表してくれたのは筑波センターにて 10/27～11/15 の日程で実施された課題別研修「サブサハラアフリカ・気候変動に対するレジリエンス強化のための砂漠化対処」に参加したハビブさん（下写真中央）です。ハビブさんのアクションプランでは、年間 30 万トンの薪がニアメで使われている現状を、地域住民への啓発活動によって改善しようというもので、薪に代わる燃料（ガスや炭）の提案や、改良かまどの普及など、実践的で現実的な内容にまとめられていました。筑波センターの他に、鳥取大の乾燥地研究センターも訪問し、センターの研究者とも意見交換することができたそうです。そして、最後に発表してくれたのは、四国センターで実施された「地域の保健医療サービス実施と管理コース」に参加したボンダブさんです。香川県の地方医療システムについて感銘を受け、ニジェールのように医師の数が極端に不足ている現状（2 万 9395 人に対し医師 1 人）において、医療サービスのシステム化を早急に進める必要があると危機感を強めていました。異なる分野の 2 名の帰国研修員も、ボンダブさんの発表に強く共鳴しており、彼らにとってもまた新たな刺激となったようです。支所としても、このような機会をこれからも設け、帰国後の研修員の活動をサポートしていきたいと思います。

（企画調査員　佐々木夕子）

日本での様子を、写真と共に解説するハビブさん

自身のアクションプランについて説明するボンダブさん

[1] 2020 年 1 月現在、新しい複合印刷・コピー機が入り、この問題は解決済みです！

プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■■　みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2　■■■

『みんなの学校：住民参加による教育開発プロジェクトフェーズ 2』では、初等教育分野と中等教育分野、二つの分野にて活動しています。初等教育分野においては、住民支援の校外学習に効果的なツールを導入することですべての児童の“読み書き”と“計算”の基礎学力改善を目指す『質のミニマムパッケージ』の開発と普及に取り組み、中等教育分野においては、アクセス、格差解消、教育の質の改善など、様々な教育開発課題の改善に貢献する“機能する”学校運営委員会（COGES）モデルの全国普及を進めています。

学校活動計画策定研修の様子―校長も COGES 代表も皆が混じって、真剣に議論を戦わせています。

「中等教育分野」では、2019 年 9 月より**ニジェール全土への「機能する中等 COGES モデル」普及**へ向けた活動を実施しています。まず、10 月には、今年度新たにプロジェクトが介入を開始した 2 州内の公立・私立中学校および中・高併設校、およそ 500 校に対し、**「民主的中等 COGES 設立」**研修を行いました。その結果、研修に参加した 100%の学校にて、住民による秘密投票が行われ、見事 500 の中等 COGES が民主的に設立されました。そして、この 11 月～12 月にかけては、住民選挙で選ばれた中等 COGES 代表、会計および校長と教員代表を対象に、質の改善のための**「学校活動計画策定・実施・評価プロセス」、「リソース管理」、「中等 COGES 連合」の役割と設置**の仕方にかかる研修を行いました。両州いずれの研修会場でも、研修受講者による非常に活発な議論と積極的な参加が見られ、まさに、“住民の信任を受けて選ばれた”という自負と“自分たちが今後皆を引っ張って学校を変えていくのだ”という責任感と意気込みが感じられる研修となりました。これらの研修を経た現在は、各学校にて、学校活動計画を策定するための生徒の学力テストの実施やテスト結果をもとにした計画内容の協議・承認のための住民集会が行われています。また、今後 2020 年 1 月～2 月にかけて、新規 2 州の各県でおよそ 20 の中等 COGES 連合が立ち上がる予定です。2020 年も、引き続き、ニジェール全土に広がる「機能する中等 COGES」の維持・発展へ向け取り組んでいきます。

一方の**「初等教育分野」**では、現在、正規授業時間内に質のミニマムパッケージの一部要素を入れ込むモデル開発・試行のパイロット活動に取り組んでいます。初等教育省では、2 年前より、全国の小学校にて、新学期の 3 か月間の授業時間を通常のカリキュラムではなく、読み書き算数の基礎学力向上のために充てる「学力向上プログラム」を実施しています。

学力向上プログラム授業時間に質のミニマムパッケージ活動に取り組む児童たち。

この教育省のプログラムとプロジェクト開発の「質のミニマムパッケージ」では“児童の現状に合わせた基礎固め”という目的を共有していることから、「学力向上プログラム」に「質のミニマムパッケージ」の要素を融合させる活動モデルを試行することになりました。具体的には、新学期の 3 か月間、正規授業時間に行われる「学力向上プログラム」の時間割の一部に、「質のミニマムパッケージ」モデルの習熟度別学習（TaRL；Teaching at the Right Level）アプローチ活動を導入し、能動的な児童の学びを通して短期間での基礎学力改善を促進していきます。

現在までベースラインとミッドラインの学力テストが各校にて実施されましたが、わずか 1 カ月間で読み書き・算数の基礎学力が向上していることが確認されており、2020 年 1 月のエンドラインテストの結果が、今から大いに期待されます。このパイロット活動が大きな一歩となり、全国の小学校で実施されている「学力向上プログラム」とともに、「質のミニマムパッケージ」も全国に広がるよう取り組んでいきます。

（EPT 専門家　影山晃子）

■■ PASVA:農業普及システム改善プロジェクト ■■■

毎月、普及員を中心とする現場の活動を報告していますが、今回は、C/P と共に参加したセネガル国際 WS の様子をお伝えします。

12 月 10～12 日の 3 日間、C/P3 名（IPDR[2] 講師、ニアメ州農業課長、DVTT[3] 職員）及び専門家 1 名（副総括/農業普及 2）がセネガルで開催された SHEP 国際ワークショップ（以下 WS）に参加しました。WS には西アフリカ各国[4] 及びマダガスカルの合計 8 カ国から SHEP 本邦研修に参加し、現在各国で SHEP 活動を担当・実施している各国農業普及関連省庁の職員を中心に、セネガル、マダガスカル、本邦の SHEP 日本人関係者等が集まりました。WS は、セネガル農業省における 2 日間の WS（主に各国の活動報告・質疑応答）、3 日目には市場及び SHEP 活動農家の視察を行いました。

写真１　WS 開会式

ニジェールの発表は、IPDR の農業分野担当講師で SEHP の講義を行っている Ounani 氏が実施し、ニジェールの SHEP は帰国研修員の活動（IPDR 校長）から SHEP 活動を開始していること、IPDR での授業の内容、生徒の理解状況（テストの結果、受講生の声）、本技プロの活動や連携（IPDR 学生によるプロジェクトサイト訪問）等について発表しました。

質疑応答では、他国参加者から、将来の普及員となる IPDR 学生に対し SHEP の内容が授業にとりいれられていることを高く評価する意見、IPDR の授業概要、具体的なカリキュラム、教材、学生の反応などについて質問が多く寄せられ、C/P は休憩時間も他の国の参加者から多くの質問を受けていました。

写真２　Ounani 氏による発表

写真３　昼食中も意見交換（左がセネガル SHEP スタッフ）

3 日目の視察は、セネガルの SHEP プロジェクト（小規模園芸農家能力強化プロジェクト：以下セネガル SHEP）の活動サイトである市場（ダカール州 Thiaroye 市場）で市場関係者との意見交換、野菜栽培が活発なニャイ地区で SHEP 活動を行っている農家との意見交換を行いました。

3 日間の日程を通じ、C/P3 名は、各国のプレゼンテーションを熱心に聞き入り、積極的に質問していました。特に、セネガルの SHEP スタッフとは、積極的に意見交換を行い、現在のニジェールの SHEP の課題に対する意見や、今後予定されているお見合いフォーラムの準備、運営に関する具体的なアドバイスを頂きました。本プロジェクトでは、今後もセネガル SHEP 関係者とは在外補完研修、第三国研修（検討中）などで積極的に連携をして

---

[2] IPDR: Institut Pratique de Developpement Rural 農業実践開発学校

[3] DVTT: Direction de laVulgarisation et Transfert des Technologies 普及局

[4] セネガル、マリ、ブルキナファソ、ナイジェリア、ガーナ、コートジボワール、ニジェール

写真４，５　市場での聞き取りの様子

いくことを検討しています。

また、個人的には、各国の参加者との意見交換に加え、専門員、セネガル SHEP の方々とも意見交換ができたのが収穫でした。余談ですが、JOCV の先輩にも久しぶりにお目にかかることができました。各国の参加者の中には、2020 年 2 月の SHEP 本邦研修参加予定の方も含まれており、東京での再開を約束しつつセネガルをあとにしました。

ニジェールに戻り、C/P は熱がさめないうちに、12 月 19 日にニジェール支所に帰国報告を行っています。報告では、ニジェールのプレゼンテーションに対し多くの質問がよせられたこと、他国では他ドナープロジェクト等と連携しており、ニジェールもその可能性があり実現に向け動き出したいこと、セネガルの普及員やプロジェクトスタッフと話をするなかで、当初は農民のモチベーションが上がらず苦労をしたことをきき、今プロジェクトの現場で苦労している普及員にもそのことを伝え励ましたいなど、熱心に語るすがたが印象的でした。プロジェクトでは、12 月 30 日に予定しているニアメ州月例会議において、ワークショップに参加した 3 名がプレゼンテーションを準備し、関係者に対して知見共有を行います。

写真５　JICA ニジェール支所への報告

（PASVA 専門家　長井宏治）

新シリーズ　国際機関で活躍する日本人＠ニジェール

皆さま、新年明けましておめでとうございます！本年もどうぞよろしくお願い致します！！
新年・オリンピックイヤーということで、新たなコーナーをまたまた勝手につくらせて頂きました。お題のとおり、「国際機関で活躍する日本人」の方々からのお便りや活動をこのコーナーで紹介していきたいと思います✨さて、初回を飾るのは、現在世界銀行に勤務されている諏訪理さんです。大出企画調査員とのひょんな再会から、原稿を頂くに至りました（感謝）。

諏訪理と申します。現在、世界銀行のアフリカ防災部で働いています。主に気象、気候、水文サービスや、早期警報といった仕事をしており、ニジェールにもたまに出張に来る機会があります。アフリカの国々が天気予報や季節予報、自然災害に関する警報をきちんと出せるようにする、そういった情報がいろいろなセクターのプランニングやリスク管理に使われ「災害に強い」発展に寄与しよう、といったことを目指しています。ニジェールでは主に、サヘル地域旱魃対策政府間常設委員会（CILSS）の専門機関でニアメに本部がある AGRHYMET Regional Center ということころと一緒に仕事をしています。AGRHYMET は西アフリカの地域気候センターとしての役割があり、地域の国々が気候サービスを提供するにあたって、AGRHYMET とどういった協働体制を構築・強化していくのか、といったような議論や支援を国連専門機関である世界気象機

関(WMO)と一緒にすすめています。ちなみにニアメにはアフリカ大陸の気候センターである、開発のための気象適応アフリカセンター(ACMAD:African Center of Meteorological Application for Development)もあるため、ニアメは気象・気候サービスの世界ではアフリカの中で重要な役割を担っている都市なのです。

気象、気候、水文サービスは世銀の中ではニッチな分野ですが、その重要性は確実に高まっており、この 10 年間で世銀のこの分野への投資額は 3 倍以上増え、現在のポートフォリオは 10 億米ドルほどになりました。特に気象や気候災害の多い、東南アジア、南アジア、アフリカでの投資の増加が特徴でしょうか。この分野では最近、産官学の協働の議論も盛んになり(https://www.worldbank.org/ja/events/2019/04/05/20190405drmhubtokyo-21st-seminar)、日本の貢献も非常に大きいものがあります。私も微力ながらこの分野の発展に貢献していければと思っているところです。

ところでなぜニジェール支所便りに投稿をさせていただくことになったのでしょうか？先日のニジェール出張の際、同僚と QG レストランで食事をしていたのですが、隣のテーブルから日本語が聞こえるではありませんか！ニジェールではあまり日本語を聞かなかったので、嬉しくなって、つい話しかけました。それがニジェール支所の大出さんでした。実は大出さんとは 12 年前にお会いしたことがあったこともその後に判明。私は青年海外協力隊 19 年度 3 次隊としてルワンダに派遣されていたのですが、派遣前訓練の二本松訓練所に任国事情を話に来てくださったのが、ちょうどルワンダ事務所でのお仕事を終えられたばかりの大出さんだったのです。偶然の再会にびっくりでした。びっくりのついでに投稿までさせていただきました。

世銀では、私は国を担当する、というよりは特定のテーマを担っているため、アフリカでは東はソマリアから西はシエラレオネまで、南はレソトと割と広範囲をカバーしています。その中にあってニアメの街は生活環境は確かに厳しいのかも、とも思いますが、ニジェール川の向こうに沈んでいく夕日はアフリカの中でも最も好きな光景の一つです。またニジェールにお邪魔させていただいたときは、どうぞよろしくお願いいたします。

THE WORLD BANK
IBRD • IDA | WORLD BANK GROUP

ニジェールにおける活動紹介　～ニジェールでゴミを集める日本人　-統合と分断、失われてありがたさが分かるもの～

支所便り 7 月号(2016)から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一准教授の～ニジェールでゴミを集める日本人～シリーズ第 25 話。今回は、2019 年からニジェール及び周辺国の動向ついて執筆頂きました。

激動の 2019 年も終わり、新年が明けた。京都はそれほど寒くもなく、年末の雰囲気を感じずに、大晦日まで研究室で過ごした。京都御所を散歩してきた学生が「桜が咲いていました」と言って、スマフォで撮影した写真を見せてくれた。ほんとうに桜が咲いていた。ただし、暖かいといっても、突然、寒波がやってくることもあるから、近頃の天候には油断は禁物である。

昨年の流行語大賞は One Team という、ラグビー日本代表のスローガンとなった。選手やコーチが一体感のある組織をめざして、スローガンに決めたのだという。

そろそろ、ニジェールに話しを移そう。2019 年 5 月 30 日、アフリカは AfCTA(African Continental Free Trade Area:アフリカ自由貿易地域)という歴史的な記録が残るであろう、協定を結んでいる。アフリカ連合の加盟国 55 ヵ国のうち、54 ヵ国が参画し、自由貿易圏を形成しようというものである。One Team ならぬ、One Africa である。これが実現すれば、経済成長が見込める、巨大市場の誕生となる。この協定の旗振り役がニジェールのモハマドゥ・イスフ大統領であり、2019 年 7 月にニアメで開催されたアフリカ連合の総会では、自由貿易圏の設立にむけて基本文書がつくられた。

その基本文書は、１）自由貿易圏の内部では製品やサービスの関税をなくし、自由な貿易を推進すること、２）90%の物品の貿易については 2020 年 7 月までに自由化し、さらに 10 年から 15 年間の猶予期間のうちに、さらに 7%の物品について自由化すること、３）自由貿易圏における非関税貿易障壁を常時、チェックし、廃止すること、４）アフリカで統一的な商取引、支払いを可能とすること、５）自由な貿易を推進すべく、貿易に関連する情報や統計データの公開をめざすという 5 本の柱からなる。アフリカにおける域内貿易では、信頼しうる情報が不足しており、アフリカの企業のうち 40%がビジネス環境に悪影響を与えていると考えており、非関税貿易障壁に関する情報の欠如に苦慮しているという。

こうしたアフリカ域内における貿易自由化という、新たな時代の幕開けを感じさせる一方で、ニジェール経済に対する深刻な動きがある。ナイジェリアによる国境閉鎖である。まさに、関税以外の貿易障壁――非関税貿易障壁というやっかいな問題である。2019 年 8 月ころより、ニジェールには影響が出ており、景気の悪化が懸念されていたのであるが、10 月になると、ナイジェリアはニジェール以外にも、ベナンとカメルーンとの国境を封鎖したのである。

現在、ナイジェリア国境では、すべての物資の輸入、輸出、ともに禁止されている。それは物資の密輸を防ぐことが主目的となっており、ナイジェリア政府の税関やイミグレーション、警察、陸軍が連携して取り締まっているのだという。国境封鎖の実行には密輸対策のほかには、米をはじめとする自国の農業自給率の向上、安価に輸出されるガソリンの取り締まりといった目的もあるのだという。ナイジェリア産の石油の 10～20%は密輸出されており、その正確な数字が分からないのが実情である。

ニアメへ向かうナイジェリアのトレーラー（2018 年 9 月撮影）
プラスチック製のやかんが満載されている。ニアメでは、礼拝どきに、このやかんが使われる。

ナイジェリア産ガソリンの販売
油で汚れた黄色のプラスチック容器はガソリン販売の目印で、ナイジェリア国境のちかくの都市ではごく普通に販売されている。

各都市の「ガソリン・スタンド」
750ml の瓶に入れられたナイジェリア産ガソリンが販売されている。

こうした国境閉鎖により、ナイジェリアでは輸出の不振と景気の悪化が危惧されているが、ニジェールをはじめとする近隣国では食料や物資の不足、物価の上昇が懸念されており、物とサービス、人の自由な動きをうながす自由貿易圏の構想に逆行しているという強い意見も出ている。こうした動きによって、これまで長年にわたり西アフリカで培われてきた取引慣行や信頼関係が破壊されることも危惧されている。

1970 年代と 1980 年代の干ばつにより、サヘル地域では何十万人という死者が発生した。この甚大な被害が発生したのは、干ばつだけでなく、市場の機能不全、

ニジェール産のタマネギ
ニジェールの中南部の都市、ガルミはタマネギの産地として有名であり、乾燥した気候がタマネギに強い風味を出すのだと言われる。

トレーラーで近隣国に輸出されるガルミのタマネギ

道路や輸送インフラの欠陥により物資が運ばれなかったのが大きな原因のひとつであった。近年の気候変動によって農業生産の大幅な減少があっても、多数の餓死者が出ていないのは、いまだ脆弱だとはいえ、流通網の整備が続けられ、援助食料をふくむ物資の輸送が可能となったことが大きい。しかし、大国ナイジェリアによる非関税障壁の設定は物資の自由な輸送をさまたげ、ニジェールにおける物資の不足と物価の上昇をもたらそうとしている。友人からの情報によると、夜になると、バイクや車で物資をニジェール国内に運び、密輸で稼ぐ者が増えたのだという。ナイジェリア政府による密輸禁止の政策によって、密輸が横行し、利潤をもたらしているという皮肉な結果が生まれている。アフリカ自由貿易圏への道のりは、いまだ、なお遠いのかもしれない。アフリカにおける地域統合と分断には、今年も、ひきつづき注目する必要があるだろう。

昨年 12 月 10 日には、マリ国境にちかいニジェール国軍の基地が武装集団に襲撃され、71 名の兵士が死亡し、12 人が負傷するという、いたたまれないニュースが入ってきた。国旗に包まれた兵士の遺体をまえに、大統領が祈りをささげる写真は衝撃的であった。ニジェール情勢がなかなか好転しないことに心が傷むとともに、殉職したニジェール兵には、謹んで哀悼の意を表します。

＊＊＊＊＊

年末に、ニジェール共和国名誉領事館より挨拶状をいただきました。2019 年 12 月末日をもって、在東京ニジェール共和国名誉領事館を閉館することが、ていねいな文面で記されていました。わたしは 2000 年に初めてニジェールへ行ってから、のべ 29 回にわたって渡航してきました。このすべての渡航にさいして、ニジェール名誉領事館に入国ビサを申請し、ビサを交付していただきました。

名誉領事館の閉館のあと、ニジェールへ入国するには、パリか、北京、あるいはアジスアベバのニジェール大使館で入国ビサを取得する必要があり、今後、ニジェールへ渡航するときには、どうしたらよいのかという不安もよぎりますが、これまでニジェールと日本との橋渡しをしつづけ、経済や文化をはじめ人的交流をささえてくださった、海外ウラン資源開発株式会社のみなさまと、名誉領事をつとめてくださった河野正樹氏と事務局長の久保環さん、そして歴代の名誉領事とスタッフのみなさまに深くお礼を申し上げます。

冒頭の日本の流行語大賞について、残念ながら気の利いたコメントはできませんが、こちらニジェールも実にいろいろなことが起きた 2019 年でありました。大山先生が書かれているように 7 月の AU 首脳会議に向けて急ピッチでニアメ市内のインフラ整備や新空港・ホテルの建設が進み、開催期間中はすべての宿泊施設が一杯になるほどの賑わいを見せていました。その間に出されたアフリカ自由貿易圏構想。本国イスフ大統領が旗振り役となっているので、なおさら支持したいとは思いますが、西アフリカ通貨問題も燻る中、この壮大な計画の実現は程遠い、というのが大方の見方でしょうか。ナイジェリア国境封鎖の影響は、まさにそのような流れに水を差す出来事で、特に当国と関係の深い、タウア州やマラディ州の経済に大打撃を与え続けています。そして、年末に起きたイナテス軍事キャンプ襲撃。この惨事に対し、ニジェール国中が怒りと悲しみに暮れ、3 日間喪に服すという異例の大統領令が出されました。このような状況下にあって、2020 年の社会経済・治安状況を楽観視することは非常に難しいですが、平和を愛するニジェールの人々が、以前のように平穏な日々を送ることができるよう、この場を借りて強く希求します（Y.S）。

巻末連載企画！ ODのいちおし

写真 1 ：川沿いにある住宅地域（2019 年 9 月撮影）

今からさかのぼること 3 か月以上、雨期真っただ中の 9 月の晴れたある日、ニアメの洪水被害状況を調べるため、ニアメ市内南部地域訪ねました。浸水による家屋の崩壊、汚水の滞留、至るところでの道路の通行不可、ニアメの一般市民の生活環境の厳しさを目の当たりにしました。当時避難民は市内 3 地域から 7,346 人にまで上りました。

写真 2 ：中国・ニジェール友好橋から見た洪水被害地域の様子。

現在、既に雨の心配のなくなった 12 月入ったにもかかわらず、いまだにニアメ市内で避難民が生活していると聞き、ニアメ州知事に日参すること数日、何とか許可を取り付け、避難民のキャンプ場を訪れてきましたのでその状況をお伝えします。

訪問した 12 月 17 日 11 時、ニアメ市南部の高台にあるシギヤ地区では、303 世帯、約 2,600 人が、普段は軍の訓練などで使われる広い敷地内で生活をしていました。広い土地には転々と「サウジアラビアからの支援」と書かれた大きなテント（7 人から 12 人の世帯用）が設置され、奥の方には藁ぶきの小屋がいくつも並んでいます。入り口には軍のセキュリティ担当者が配置され、周囲は壁に囲まれています。多くのテントは新たな住居を確保して引っ越しを済ませた家族が使用していたもので、現在は空き家となっていたので、中を見せてもらいました。ペラペラの木綿の内側に薄い網上の布が張ってある軽い素材のテントで、床は砂地のまま。雨に強い作りとは言えず、雨期に浸水のために避難した彼らが、この薄いテントでどうやって生活していたのか疑問に思いました。

写真 3 ：テント内の様子

このキャンプを立ち去る条件は、避難した家族が再び水害に遭うことのない地域に彼ら自身で家を建てることですが、様々な理由（政府から良い土地があてがわれない、住居を建てる資金がない）で 12 月の今になっても市内から遠く離れ、水や電気のないこのサギヤ地区のキャンプ場

写真 4，5　キャンプ場の様子（外観）

での生活を強いられているとのことでした。周囲には学校もなく、そこで生活する多くの子供たちは学習の機会を得られずにいると思われます。

写真 6　青々とした田んぼ

支援も大幅に不足しており、食糧は政府が、それ以外は国際機関やドナーなどが支援する枠組みとなっていますが、需要に供給が追い付いていません。また、敷地内に給水塔はありますが、燃料費不足のため発電機が動かせず、現在キャンプ場内には水もありません。

さらに、同行した州政府職員の説明によると、これから雨期に入るニジェール川上流の遠く離れたギニアで大雨が降れば、再び 1 月頃にニジェールで洪水が起きる可能性もあるとのことで、川沿いの地域の安全についてもまだまだ油断はできません。遠く離れたギニアからマリを通ってニジェールで洪水を起こす水の威力、おそるべしです。

9 月に水地域であった場所も尋ねました。現在は灌漑され、田植えの季節を迎えて青々とした稲が植えられたばかりでした。ここも 9 月には少し先の川の土手が決壊して道路も壊れ、通行不可の地域でした。生き生きとした稲を見るとホッとしますが、水の大切さと怖さ、水の管理と共存の難しさを考えさせられる一日となりました。

（企画調査員　大出理恵）